

---

# 見習い悪魔

坂田火魯志

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

見習い悪魔

### 【Nコード】

N9594M

### 【作者名】

坂田火魯志

### 【あらすじ】

見習い悪魔チブスが魔神に最初の仕事を命じられる。そうして人間界に向かうと天使がいて。悪魔と天使のコメディです。

## 第一章

見習い悪魔

「チブスよ」

「はい」

真っ黒い身体に蝙蝠の翼、先が三角になった尻尾に頭には二本の角、そして左手には大きなフォークがある。見るからにそれであつた。

「御前の最初の仕事だ」

「有り難き幸せ」

こう己の前にいる何か得体の知れない全身が燃え盛った存在に対して片膝をついた姿勢で応えた。

「魔神アミイ様」

「うむ。それではまずは人の世界に行くのだ」

「そしてそれを誘惑し」

「魂を一つ手に入れてくるのだ」

「これがそのチブスへの命令だった。」

「よいな。それではだ」

「はい、只今からすぐに向かいます」

「誰でもよい」

「魔神はそれにはこだわなかった。」

「要するに天界の連中を困らせてやれ」

「魂を手に入れなくてもですか」

「無論それが最高だ」

それは変わらないのだと言いはする。その全身が燃え盛った魔神はだ。おかげで今魔神は燃え盛る炎にしか見えない。身体があるかどうかさえわからない。

「しかしだ。御前ははじめての仕事だ」

「だからですか」

「そうだ。今はそれでもよい」

「天使を困らせることを」

「あの連中は自分達に絶対の正義があると思っている」

このことを実に忌々しげに言うのであった。

「それが気に食わぬ。傲慢だ」

「傲慢ですか」

「傲慢なのはあの者達こそがだ」

魔神の言うことは一理あるようではある。

「だからだ。困らせてやれ」

「はい、それでは」

「手段は問わぬ。我等は我等のやり方があり正義がある」

魔物はそうだというのだ。

「あとは巨人も許すな」

「巨人も？」

「それもわかる」

これについては今は言わずさらに言う魔神だった。

「それを奴等に見せてやるのだ」

「わかりました」

こうしてであった。チブスは人間の世界に降り立った。降り立ったのは日本という国であった。その大阪という街にやって来たのである。

大阪を見て最初の感想は。露骨に嫌な顔をして出て来た。

「汚い街だなあ」

思わずこう言ってしまった。

「何だよ、あちこちゴミだらけだし言葉は汚いし」

そうしたものを見ながらの言葉である。

「黒と黄色の模様ばかりだし。河豚や蟹や他の気色悪いおっさんの看板があるし」

そうしたものを上から見ているのだ。

「おかしいな街に来たな。人間の世界ってこんな街ばかりかな」

彼が思っている街とは違っていた。少なくともだった。

そしてだ。真っ黒いやけに汚い川に架かっている橋のところだ。縦縞の帽子を被った小さな女の子が母親と見られる女性に手を引かれながら文句を言っていた。その文句はというと。

「何で阪神弱いん？」

「あれでもかなりましになってんで」

ジーンズに茶色のショートヘアの母親が彼女にこう言うのだった。

「昔なんてな」

「もつと凄かったん？」

「あほみたいに弱かったわ」

そうだったというのだ。

「もうな。負けるのが普通やったんや」

「今半分位は勝ってるで」

「昔は三回に一回しか勝てへんかったんや」

母はこう娘に話すのだった。

「物凄く弱かったんや」

「じゃあ今は普通にあかんだけやな」

「そや、それだけや」

まだましだというのだ。

「それでもええと思わなあかんで」

「けれどお父ちゃんあれやん。阪神は弱いって」

「弱いいうても昔程やない」

母はあくまでこう言うのであった。

## 第二章

「それこそ百敗する位やったんや」

「そうやったんか」

「そうやった。満足せなあかんで」

こんな話をする母娘だった。そしてそれを見てチブスはすぐに自分のすることが何か考えた。当然それは悪魔としての考えである。

「よし、それなら」

彼は言うのだった。

「阪神を負けまくるようにしてやろうかな」

「そうだ、阪神は負ける」

ここでもう一人の声がしてきた。

「負けて負けて負けまくれ。それが神の御意志だ」

「何、神!？」

神と聞いてだった。チブスはすぐにその声がした方に顔を向ける。するとそこにいたのは何と天使であった。悪魔の宿敵の彼等である。

「御前、天使か」

「左様、私は天使」

金髪に青い目の中性的な顔立ちをしている。白い服を着ており背中には白い翼がある。頭の上には白い輪さえある。そしてその天使は名乗ってきた。

「天使ミザルよ」

「ミザル」

「なっただばかりだけれどね。神は阪神の敗北を望んでおられるのよ」

「何だよ、それは」

「阪神は滅多に優勝してはいけないチーム」

ミザルは言うのであった。

「だからよ」

「何で滅多に優勝したら駄目なんだ？」

「阪神だからよ」

理由になっていないが何故か納得できる言葉だった。

「神はそう仰ったわ」

「じゃあ何処が優勝しないといけないんだよ」

「中日よ」

ミザルはそこだというのだ。

「中日こそがなのよ」

「中日！？そんなチームがあるのかよ」

「神の好物はきし麺に味噌カツ、それに天むすにいろいろなのよ」

「何でそんなもの好きなんだよ」

「それに対してサタンの好物は」

何故か食べ物の話になっている。

「きつねうどんにたこ焼きにお好み焼き、それと河豚ね」

「よく知ってるな」

「知ってるわ。とにかくね」

「その中日を優勝させるのが神の意志なんだな」

「そして阪神を負けさせることが」

「よし、それならおいらはだ」

神の意志に反することが悪魔だ。それならもう選択肢は一つしかなかった。チブスはその選択肢を正確に選んだのであった。

「その阪神を優勝させるぞ」

「それが今回の悪魔のやり方なのね」

「そうだよ。見てろよ」

最早売り言葉に買い言葉だった。

「阪神を優勝させてやるからな」

「こっちもよ。中日を優勝させてやるわ」

こうして二人の戦いがはじまった。まさに龍虎の戦いだった。その戦いがはじまってだ。二人は甲子園と名古屋を中心に日本全土を回ることになった。

チブスは阪神についてだ。その活躍に力を貸した。

「よし、ここだ！」

外野フライが来た。かなり大きい。

そのボールにフォークを向ける。そこから黄色い稲妻に似たものを出してそれでボールを操る。そのままスタンドに放り込んだのであった。

「やったーーーー！金本決勝アーチ！」

「やった！」

チブスもそのホームランを見て会心の笑みを浮かべる。

「これで阪神の勝ちだ！」

そしてミザルもであった。

際どいところにボールが転がる。そのボールを一瞥して。

「動け！」

こう言うのであった。ボールは突如としてイレギュラーを起こしグローブに収まる。それが華麗なゲッツーになってピンチを防いだのだ。

### 第三章

「荒木ファインプレイ！」

「これでよし」

ミザルはそれを見て笑うのであった。

「勝ったわ」

こんなことをして二人はそれぞれ阪神と中日を勝たせていた。戦いは彼等にとつてはまさに神と悪魔の戦いであった。彼等以外の誰も知らないがだ。

とりわけ直接対決の時はだ。二人は激しく伊いがみ合った。

取っ組み合い寸前になってた。そのうえで言い合うのであった。

「今度は阪神が勝つからな！」

「また中日が勝つわ！」

お互いこう言って引かない。

「絶対に勝つ！」

「見ていなさい！」

こうしてそれぞれのチームのベンチの上に陣取り力を尽くす。選手を、そしてボールを操り戦うのであった。とはいっても彼等は選手、そしてチームの手助け程度しかできない。それだけの力しかないのだ。

しかしそれでも彼等はそれぞれの力を尽くす。外野フライがあがれば。

「フライになれ！」

「ヒットになれ！」

すぐにそれぞれ力を出すのであった。二つの力が激突する。

二人の力が炸裂し打ち合う。ボールよりも先に、であった。

「邪魔するな！」

「それはこちらの台詞よ！」

すぐに言い合う二人であった。

「おのれ、よくも」

「私の邪魔を」

そんなことを言っている間にボールは落ちる。そしてセンターフライになって終わりであった。

それを見たミザルは。しまったという顔になって言うのであった。

「参ったわね、これは」

「ははは、ざまみろ」

チブスはそんな彼女を指差して楽しそうに笑ってみせた。

「おいらに気を取られてるからだ」

「これで試合終了って」

「サヨナラのチャンスが不意になったな」

「次よ」

しかしミザルも諦めない。こう言うのだ。

「次は中日が勝つからね」

「次も阪神だよ。おいらがついてる限り阪神に負けはないさ」

「何よ、阪神なんて百年に一回優勝すればいいのよ」

ミザルはムキになった顔で言い返す。

「それだけでね」

「そっちこそ何十年も日本一になってないじゃないか」

「何なら杉下茂若返らせてあげるわよ」

「じゃあこっちは村山実復活させてやるうか」

二人はとんでもないことを言い出した。

「まさに中日の為に生まれた英雄をね」

「今も甲子園のマウンドで阪神を見守る英霊なんだぞ」

「悪魔が英霊を蘇らせるっていうの？」

「宗教が違うからいいんだよ」

チブスも無茶を言う。

「何なら小山正明を蘇らせてやるぞ」

「じゃあこっちは星野仙一よ」

「今星野はこっちにいるだろうがよ」

「くっ、そうだったわ」

ミザルはチブスの今の言葉に殺人未遂者の顔になった。

「星野、裏切ったわね」

「阪神の魅力に惹かれたんだよ」

「裏切り者は許さないわ」

今度は秘密警察の人間の顔になるミザルであった。

「見てらっしゃい、天誅を加えてあげるわ」

「やれるものならやってみな。おいらが絶対に邪魔してやるからな」

「ふん、まずは中日を優勝させてみせるわ」

だがミザルは今はそのちらでの対決は避けるのであった。

「何があってもね」

「やるってんだな」

「そうよ、やってやるわ」

チブスもそうだがミザルもムキになっていた。

「天使の誇りにかけてね」

「おいらだって悪魔の誇りがあるんだ」

まさに売り言葉に買い言葉であった。

## 第四章

「だからこそ何があってもだ」

「こつちだってやってやるわよ」

「やらないでか」

「何よっ」

こんなやり取りばかりだった。そしてペナントは進みいよいよ最後の試合だった。甲子園において阪神と中日、どちらが勝った方が優勝という状況になった。

その甲子園でだ。例によってチブスとミザルは睨み合っている。

それぞれグラウンドの上に浮かびそのうえで言い争ってもいた。

「さて、今日か」

「そうね、今日ね」

ミザルはチブスの言葉に応えてきた。

「いよいよ我がドラゴンズが優勝する時よ」

「そうだな。愛するタイガースが優勝する時だよ」

「駄目虎らしく負けていなさい」

「そつちこそいつもみたいにくそぞという時に負ける」

お世辞にもレベルが高いとは言えない言い合いが続く。

「阪神にはおいらがついてるんだ」

「中日には私がついているのよ」

「へんっ」

「ふんっ」

ここで顔を背け合う。それでもまだ言い合う。

「どつちにしても今日で終わりだ」

「そうね、カタがつくわ」

こつ言い合うのであった。

「泣いても笑ってもこれで終わりだ」

「それならよ」

こんな話をしてそのうえでプレーボールを受けるのであった。そうしてその戦いはだ。まずは中日側からの急襲からはじまるのだった。

一回表二死二、三塁。いきなり阪神にとってピンチであった。

チブスは一塁側で苦い顔になっている。それに対してミザルは三塁側でにこにことしている。まさに正対称な顔になってそこにいた。

「ちっ、まずいな」

「ふふふ、いい状況ね」

「ここで打たれたら」

「流が大きく変わるわね」

「そうなってたまるかよ」

チブスは苦々しい顔で言った。

「阪神はピッチャーのチームなんだぜ」

「ピッチャーが打たれていつも負けるチームね」

「何っ!？」

「今日もよ」

怒るチブスにさらに言うのであった。

「今ここで打たれてそのまま負けるのよ」

「ちっ、頑張ってくれよ」

マウンドにいるそのピッチャーを見ての言葉だ。

「岩田、ここはな」

「何度も中日が打っているピッチャーだけれど」

今ミザルは波に乗っていた。

「ここでもなのね」

「何があっても守るからな」

チブスは固唾を呑んだ。そして岩田が投げた。そしてそのボールがだ。あえなく打たれた。ボールは一二塁間を凄まじい速さで抜けようとする。

「まずい!」

「やっただわね!」

チブスは真っ青になりミザルはにこりとなっていた。

「このまま二点か？」

「勝ったわね」

しかしであった。そうはならなかった。

藤本がそこにいた。その彼が横っ飛になる。しかし。

ボールは僅かに間に合わない。そう見えた。

だがここだ。チブスは魔術を使ったのだ。

「えいっ！」

「くっ、ここで使ったのね！」

「ここで使わなくてどうするんだ！」

こう言うのである。そしてだ。

そのボールは彼のグローブの中に収まったのだった。まさに一瞬だった。

だがこれでだ。阪神はピンチを脱したのだった。

そしてだ。これは同時に中日にとってはチャンスが不意になったことだ。ミザルはこのことに齒噛みしさも悔しそうに呟くのであった。

「忌々しい、何てことなの」

「ふう、危なかったぜ」

チブスはほつと安堵して全身から汗をかいていた。

## 第五章

「もう少しでだったな」

「藤本も凄かったけれどあんたも」

「こういう時に使うものなんだよ」

「そうだと返すのであった。」

「おいらの力はな」

「言ったわね、私の力だってね」

「それは彼女達もだというのだ。」

「同じなのよ」

「へっ、それでドラゴンズを優勝させるってのかよ」

「絶対にね。さて、試合はまだ動くわ」

「ミザルは今攻防が入れ替わるグラウンドを見て言った。」

「今度はどうなるかわからないわよ」

「いい度胸だ。今度もおいらが阪神を救ってやる」

「中日を優勝させてやるわよ」

「こう言い合いまた試合に向かう。そして五回。城島が打った。」

「大きいな！」

「まずい！」

二人はそれぞれ声をあげた。

「このまま入れ！」

「させるものですか！」

ミザルはすぐに力を放った。城島のそのボールを押し返そうとする。

城島独特のそのボールを巻くアーチに対してだ。ボールは押し返されなかった。だが軌道がそれだ。そして僅かにファールになった。これに一塁側は落胆し三塁側は胸を撫で下ろした。そして二人も。

「ちっ、やってくれたな」

「やってやったわよ」

二人でそれぞれ言い合うのだった。

「全く。ピンチだったわ」

「チャンスだったのによ」

「何があっても中日を優勝させないと」

ミザルは完全に意地になっていた。

「あんたにもね。負けないわよ」

「負けてたまるかよ」

しかしチブスも言う。

「阪神は強いんだ、おいらだってな」

「最後まで。やってやるわよ」

「こっちもだ」

二人は火花を散らし続ける。そして両チームと二人の攻防はさらに続きだ。遂に九回裏となった。攻防もいよいよ佳境だった。

その九回裏も瞬く間にツーアウトになった。マウンドにいるのは岩瀬である。

「岩瀬のスライダー、今日は特に何なんだよ」

「すごっ、化け物みたいな高速スライダーじゃない」

二人は岩瀬のそのスライダーを見て唖然となっていた。

「ありやおいらもどうしようもないな」

「私が力使う必要ないじゃない」

九回はお互い手出しできないと思われた。しかしであった。

「こりゃこの回は」

「何もなくていいわね」

こう言って試合を見ていく。そして。

バッテリーボックスに金本が入った。その鋭い目で岩瀬を見据える。

「兄貴、頼むぜ」

チブスはその金本を見ながら呟いた。

「岩瀬抑えてね」

ミザルは岩瀬を見て祈る様になっていた。

「ここは何があっても」

「ここで決まるか？」

「金本を抑えれば」

正念場であることは明らかだった。

「勝てる」

「乗り切れば」

そしてであつた。その勝負がはじまつた。

岩瀬は一球目はストレートだった。それはまずはボールだった。

「様子見か？」

「今は」

それはわかつた。

「じゃあ二球目は」

「次は」

二球目もストレートだった。それはストライクだった。

そして三球目は内角ぎりぎりのボールになった。これでワンストライクツーボールだった。バッターにとっていささか有利と言えるカウントだった。

## 第六章

だがチブスはそれでも安心してはいなかった。切迫した顔で見ていた。

「相手は岩瀬だからな」

「そうよ。岩瀬よ」

ミザルもそれを言ってきた。

「岩瀬を甘く見ないことね」

「中日はいい選手が多いな」

これはチブスも認めることだった。

「強い筈だよ」

「そうよ、中日は強いだよ」

ミザルはこう言って笑う。しかしその笑みには余裕がない。

「だからこの試合も勝つわよ」

「いや、阪神も強いぞ」

チブスもここで言い返した。

「だから負けるか。兄貴、負けるなよ」

「岩瀬、やって」

また二人はそれぞれ言う。

「ここで決めてくれ」

「抑えてくれたら後は打線がやってくれるから」

その中でだ。岩瀬は四球目を投げた。それは。

シュートだった。内角低めに入った。金本はそれを空振りしてしまった。

「まずい……………」

「よしっ」

チブスは歯噛みしミザルは少しだけ微笑んだ。

「あと一球か」

「あと一球ね」

二人の言葉はそれぞれ正反対であった。

「一球しかないんだな」

「一球で終わるのね」

二人はその一球を見ていた。それがどうなるかだった。

そしてだ。岩瀬はその最後の投球に入った。金本も構える。

「次のボールは」

「あれしかないわね」

二人は岩瀬が最後に投げるボールをわかっていた。あれしかなかった。

「あの高速スライダーだな」

「それだな」

それを投げるのだった。ベースを横切らんばかりの高速スライダーが投げられる。それはまさに魔球だった。そう呼ぶに値するものだった。

その高速スライダーが投げられてだ。金本もバットを振った。すると。

「行け！」

「しまった！」

また二人の言葉は逆になっていた。金本は打ったのだ。

そしてそのまま腰の力を極限まで使って引く張る。腕もきしまんばかりになっている。

力で振り切った。ボールは一直線に飛ぶ。

「行け！」

「くっ！」

チブスもミザルも何故か今は力を使わなかった。見ていただけだ。

「兄貴！そのままだ！」

「岩瀬！まだよ！」

ボールはまだ激しい攻防の中にあつた。金本が勝つか岩瀬が勝つか。空中でまだせめぎ合っていた。

しかしだ。ボールは阪神ファン達が歓喜の顔で迎えるライトスタ

ンドに入った。ボールが入った瞬間爆発的な歓声が起こった。

それを見てだ。チブスも言った。

「よし、やったな！」

「しまった………」

「兄貴、やってくれたよ！」

「岩瀬が負けるなんて………」

まさに明暗だった。

「これで阪神は優勝だ」

「やられたわ」

チブスは空中で小躍りしミザルは肩を落としていた。

「アミィー様の御意志通りになったな」

「申し訳ありません、オファニム様」

それぞれ言う彼等だった。

「よし、じゃあこれで」

「帰るしかないわね」

「次も勝つぜ」

「何言ってるのよ」

ミザルはチブスの今の言葉にきつとなった顔で返した。

「次こそはよ」

「へっ、悪魔は天使に負けないんだよ」

「何言ってるのよ、悪魔の天敵は天使よ」

「そんなの誰が決めたんだよ」

彼等は阪神ファンの優勝を祝う雄叫びが響き渡る甲子園の中で言い合う。胴上げが行われそのうえで紙吹雪が舞う。今世界は阪神のものだった。

## 第七章

チブスはすぐにアミイーの元に戻り報告した。魔神はそれを聞いてまずは喜びの声を出すのであった。

「そうか。それは何よりだ」

「はい、やりました」

「しかし最後は力を使わなかったな」

魔神はこのことを彼に言ってきた。

「それはどうしてだ？」

「あつ、すいません」

チブスは言われてやっと気付いたのだった。

「それはつい」

「人間の戦いに見惚れていたか」

「申し訳ありません」

「いや、いい」

だが魔王はそれをいいとしたのだった。

「それは構わない」

「構わないのですか」

「目的は達した。それに人間の力は確かに凄いものがある」

「そうですね。それは確かに」

「それがわかったこともいい」

それもだというのである。

「大きな収穫だったな」

「どうもです」

「そしてだ」

魔神はチブスにさらに言うのであった。

「目的も達したしな」

「私のですね」

「天使の思惑を覆した。それはいいことだ」

「はい、確かに」  
「だが」

しかしであつた。魔神はここでこんなことも言った。

「あの魔物もそれで叱責はされていないだろう」

「それは何故ですか？」

「あちらも目的を果たしたからだ」

「だからだというのである。」

「その目的をな」

「えっ、ですが」

チブスは魔神の今の言葉を聞いてだ。その大きな目をしばたかせ  
てそのうえで問うた。

「あいつ失敗しましたよ。それでもですか？」

「中日を優勝させることは失敗したがそれでも目的は果たしたのだ」

「どういふことですか？それは」

「野球は阪神や中日だけではない」

「アミイーはこのことも話した。」

「他にもチームはあるな」

「ええ、まあ」

一年間阪神と一緒にいれば嫌でもわかることだった。野球は一つ  
のチームだけではできない。特にリーグとなるとそれだけのチ  
ームが必要なのだ。

「その通りですけど」

「巨人だ」

ここで魔神はこのチームの名前を出したのだった。

「巨人を優勝させてはいけなかったのだ」

「巨人をですか」

「これは天界の考えでもあつたし魔界の考えでもあつた」

双方の考えだというのである。

「それも達成されなくてはいけなかったのだ」

「何時の間にそんなことが」

「最初御前はただ仕事に慣れさせる為に行かせた」  
その真相も話される。

「しかし。御前は野球に入ったな」

「まあ成り行きで」

「しかし他にもそうした話があったのだ」

「そうだったんですか」

「そして御前は阪神を優勝させた」

「最後はもう見ているだけでしたけれどね」

「ここではありのまま話したのだった。実はそうだったのだ。彼もミザルにしても最後の方はもう人間と人間の勝負を見守るだけだった。」

「それでもですか」

「それでもだ。決まっていたのだ」

「巨人を優勝させない」

「我々にしろ天界にしても人間の世界はある程度元気でなくては困るのだ」

その事情も話すのだった。

「その為に巨人には優勝してもらっては困ることだったのだ」

「だからですか」

「そう、だからだ」

その事情も話すのだった。

「巨人の優勝は阻止しなければならなかった」

「どうして巨人は優勝してはいけなかったんですか？」

それはチブスにはわからない話だった。魔神の話を聞いていてその間にもついつい首を傾げさせてだ。そのうえで言うのであった。

## 第八章

「それはどうしてですか？」

「だからだ。人間の世界は元気でなくては困るのだ」  
またこの理由を話すのだった。

「そうでなくてはな」

「元気でなくては」

「そうだ。元気でなくては困るのだ」

魔神の言葉は続く。

「その為に巨人は負けなくてはならなかったのだ」

「巨人が勝てばそれだけで人間達に元気がなくなる」

「では聞こう」

アミイーはチブスに対して問うてきた。

「それは」

「それは？」

「巨人というチームはどういうチームだ」

「巨人はですか」

「そうだ。どういうチームだ」

このことを問うてきたのだ。

「あのチームは」

「正直に言っていていいですか？」

まずはここから話す彼だった。

「あのチームはですね」

「そうだ。どういうチームか」

「正直言ってもかかりますね。それに気色が悪いです」

「何故そう思う？」

「何か自分達は優勝しなければならなくて妄信していて。しかも  
球界の盟主とか自称して。何か強烈に思い上がって勘違いしてます  
よね」

これがチブスの巨人への見方だった。

「嫌いな人間もかなり多かったですね。おいramも嫌いになりました」  
「それだ」

まさしくそれだというのだった。

「それなのだ。そうしたチームが優勝すればだ」

「嫌いな人間は嫌な気分になりますね」

「だからこそだ。人間世界が元気でいる為には」

「その圧倒的多数のアンチ巨人を励ます為にも」

「巨人は優勝してはならない」

そういうことだった。

「その目的は無事達成されたのだ」

「そうだったんですか」

「これでわかったな」

ここまで話してあらためてチブスに問うてみせた。

「天界もまた目的を果たしたということが」

「ええ、これで」

「巨人には無様な負けがよく似合う」

魔神はこんな言葉も口にしてみせた。

「実にな」

「実に、ですか」

「魔界も天界も人あつてのものだ」

このことも話される。

「そのことも忘れるな。いいな」

「はい、じゃあ」

「次の仕事はだ」

その仕事についての話になった。チブスは野球を通じて様々なことがわかったのだった。見習い悪魔として非常にいい経験であった。

2  
0  
1  
0  
.  
3  
.  
1  
1

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n9594m/>

---

見習い悪魔

2010年10月8日13時44分発行